



71

L210
P1

20 1 2 3 4 5 6 7 8 9 130 1 2 3 4 5

奥石神社
老頼社



は教養親王と号す。其の九の皇子は源氏の祖也。佐々木
大鶴鶴尊と号す。正字は鶴鶴と書し。徳帝の御孫也。

当社を近江源氏一統の祖神とて神領一百石又讚列九龜
系極家より毛一百石附與。其祖定成系。小藤家の氏小三

十六人の國衆八十二人の郷士あり。足利吉氏卿の時佐々木佐渡利
官入道乃卷一國を傳香し。其後又近列二ツ小分とて愛知川を

南を以て南庄と本六角と号し。又北城以北庄と本六角と云ふ。其より
連絡して弘治三年己未其祖兼頼義賢公官領職を預る

屋形と号し。六角系極とて足利の代
淨巖院 全勝山と号し。徳心僧林の作
奉尊阿弥陀佛 長丈六

用山隆亮信印一佩の御寺とて天正七年三月申旬は
小松より淨土宗と日蓮宗を宗御あり。幸ハ信長死
交小畧に

遠景山總見寺

本尊十一面觀世音

三層塔

圓通閣

總門類

當山

寺領

の梵刹

と棒を携へ

信長公其讚云 人々を以て身とばさるるなり

今古代變りて香火寂寞とて雲佛屋瓦花を猶修す

今古代變りて香火寂寞とて雲佛屋瓦花を猶修す

晴し樹々を緑塵水逝くよりて若く更し青之月ハ朔と照し
てむしにわづす我志をんる

安土山古城 惣見守の山よりなり 天守の形も
信長公の墳墓あり今も城中の石垣存せり

信長記

正二位大納言兼右大将平朝臣信長公近江國安土山を城廓小旗一可
有滞移とて為奉約先惟住の即左衛門尉長秀と可共進者天正四年
丙子正月上旬被作出し長秀之取の枳園極難を兼く日十七日小
安土山より先番信長可入具是或は叛治者近江も石集あるひハ
石と取べき山持守て大坂通路活況も云は岨崖も云はたかき
走とてく我と目小徳とく意多二月廿三日小信長公安土山被移陣座
精力と劬と幸神妙なりとて周光兼統并駿馬二匹長秀小下され
名を依道留外攝馬廻以下の屋浦割あり及れ所も鹿兒山上下下も
更に空地ありり四月朔より中丸石垣の石を引せらる小大石を引き
幸日小泳増月累マたり何共御下知とありり及れも我者ト

本三十七

也大石を乗ひ上る幸巨靈拔心鳥獲上千鉤小号は幸林縁を
其功已小成以都て信長公と幼より弓箭に推めて仁義道德の学を
勢子ども自然小私心形く理小脱く切りし其功の善進む幸恰如春
氣發生貴罰正しく邪正辨ゆ小幸生知も申川登り派小勇す
虚明るゆ小人の思ひはれも幸自西自東自北自南思ひて服せ
と小幸形ト署

近州史 あづち 安土殿守 天正四年七月より 普清卿付り

普清奉行

上一重之金具

二重目より

序大工棟梁

小細工序大工

漆師

本村次郎左衛門

後藤平四郎殿之

系對阿弥金具

岡部又右衛門

宮西遊左衛門

首 刑部

瓦焼

唐人一観

奈良瓦焼の焼

土基土瓦の鳥格七間好は上ノ七重の天守瓦造らるは代末史の焼
 堂より先一重と土瓦不周れ二重は上の廣サ南ノ二十間東西十七
 間高サ十六間半これあり柱の敷式百四格中三柱の長サ廿八間をサ天守
 或ハ先ノ三守四方之清彦殿の内みか黒漆より西十二重後ハ金の張付
 墨繪梅花狩野永徳の筆ハ同間の内書院よりありあり遠寺晚鐘
 の画其糸の版ハ盆ハ石瓦屋敷の四重半の御棚ハ鳩の画又十二重
 此間ハ我書乃絵園之鶯の間より一重ハ八重後奥四重後鶴の雜と
 悉より南十二重後ハ漢唐の儒賢の画ハ八重後あり東に十
 二重後ハ八重後其外ハ八重後これハ御膳梅の前之次ハ八重後
 右ハありあり六重後清納戸又六重後ハ御膳の布也惣金ノ水の方
 小土瓦あり其外ハ八重後廿六重後清納戸より西六重後ハ十二重
 後ハ十二重後都合清納戸の敷七所これあり其外ハ金蛇塼を築

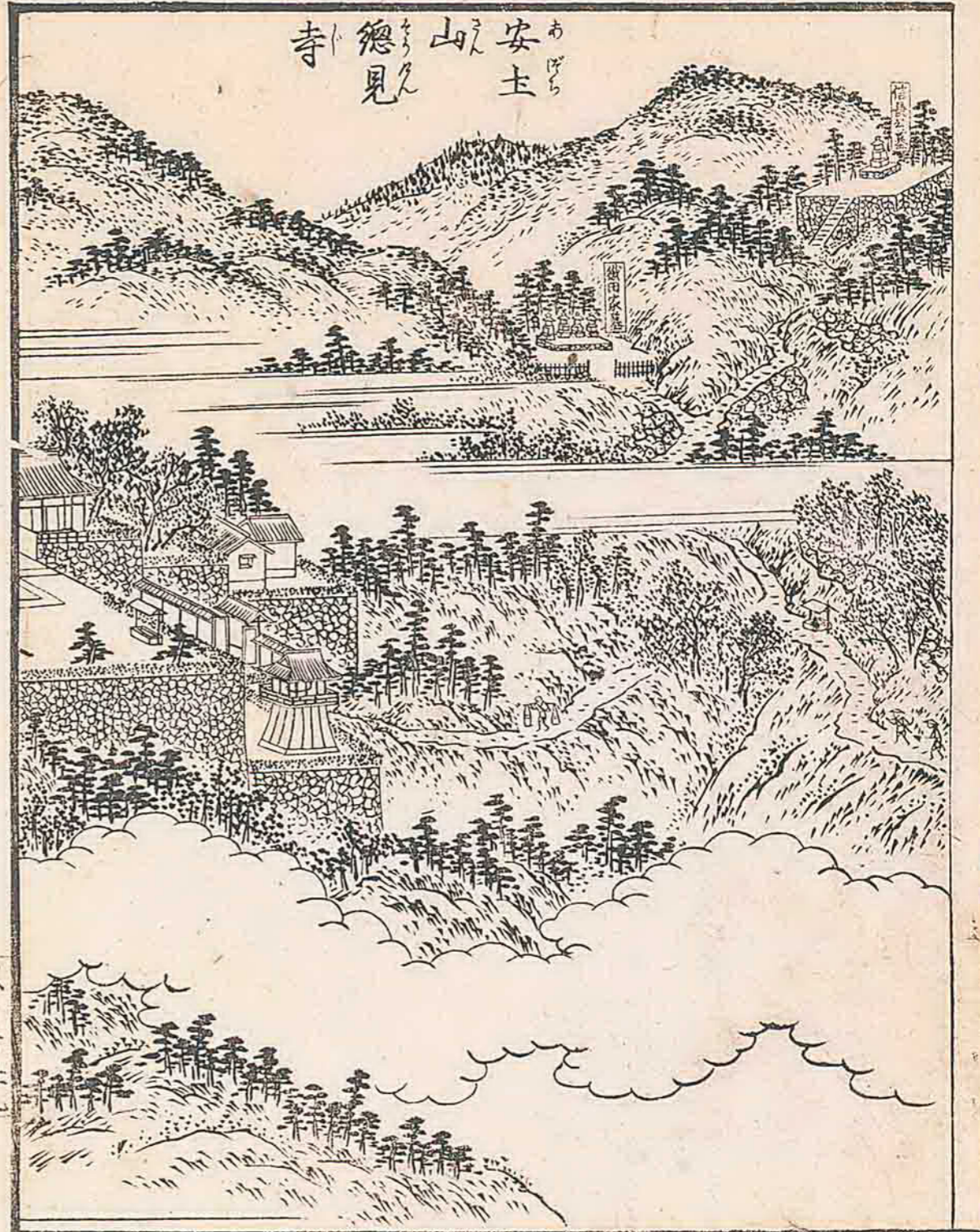
瓦焼

三重目十二重後花鳥の画これありより花鳥の間より別々西重後
 清彦の間より花鳥の絵清彦南八重後賢人の間より小瓢葉分
 駒と知れ仙人の画東北庇の間ハ八重後十二重此間上ハ八重後仙人
 呂洞賓傳説等の画あり北二十重後ハ駒の繪次ハ十二重後ハ
 西玉母の画西重後ハ八重後ハ廣極二版廿四重後清物並ハ清納
 戸ハ八重後ハ八重後あり柱敷百格半を種あり
 四重目為十二間柱と巖上ハ龍虎の殿ハ松あり南十間竹の絵
 竹之間より一重十二重後松と画ハ松の間より東八重後相不周
 鳳の絵次ハ八重後許由頼泉龍也て耳と滑ハ巢父牛と雲あり
 帰ハ兩賢の物より板郷の俸中て一画其次ハ八重後七重後松
 形ハ金蛇よりけ次十二重は二間の所ハ手鞠花と画を其
 次ハ八重後庭子此重ハ画を設ハ八重後此間よりあり



安土山懐古
遺構山上寺
空閣倚雲宮
草木榮茂古階
賦慨空憶芳金
日經營一樹工
地均江水樓基
以秦宮刻據
修築已征馬
馳西東豈忘
身土憂乍起
蕭牆中慕
逆泉所嫉
三日聊稱
旌蒼天自
予之傷手
故豐公修
之二百
年電通
古夢同
孤冢雲
煙淡茂
翠草青
苔香火
長吊首
焚傾日
暮風

西秋服那蕩



安土山 總見寺

本為一此九

信長記

九重目録あり、南水の破風は小四重を此に於てあり内外ともに色柱
朱塗内柱金箔あり繪を敷き成道後法の圖十六大弟子を圖に
淨極例織鬼諸鬼を画し端板小飛龍狀を画し高棟葱實珠彫物
あり上の七重三間四方淨座敷の内懸金泥あり外輪も亦金泥に
四方内柱昇龍降龍天井小天人彩向の躰を畫し淨座敷内中
後三皇五帝孔門十哲高山皓晋七賢を以て画し使間の戸織物之
敷六拵飾品柱みね黒漆にて布を敷く其上堅地も亦黒塗あり漆以
て蓋し一英吹おきしなり其の壯觀なり
其頃天龍寺に妙智院兼長和者とて碩学多才の活僧あり殊小
大明再渡和漢西朝の達人なる由奉世のあり及び信長公より安
土山の記を淨不望河の事とされども因縁しやされ幸濃別使下南
化和尚とて名僧ありまは則此僧小修付られ茲く惟んとりされ
るに其有淨徒ありけ人も亦兼長和者へ令せり是宜ありと云

本考一四十

互小禱し合ふし、おとも令發願され禱する事なりして則ち
禱しれり其記あり

總見寺圖通閣小掲る

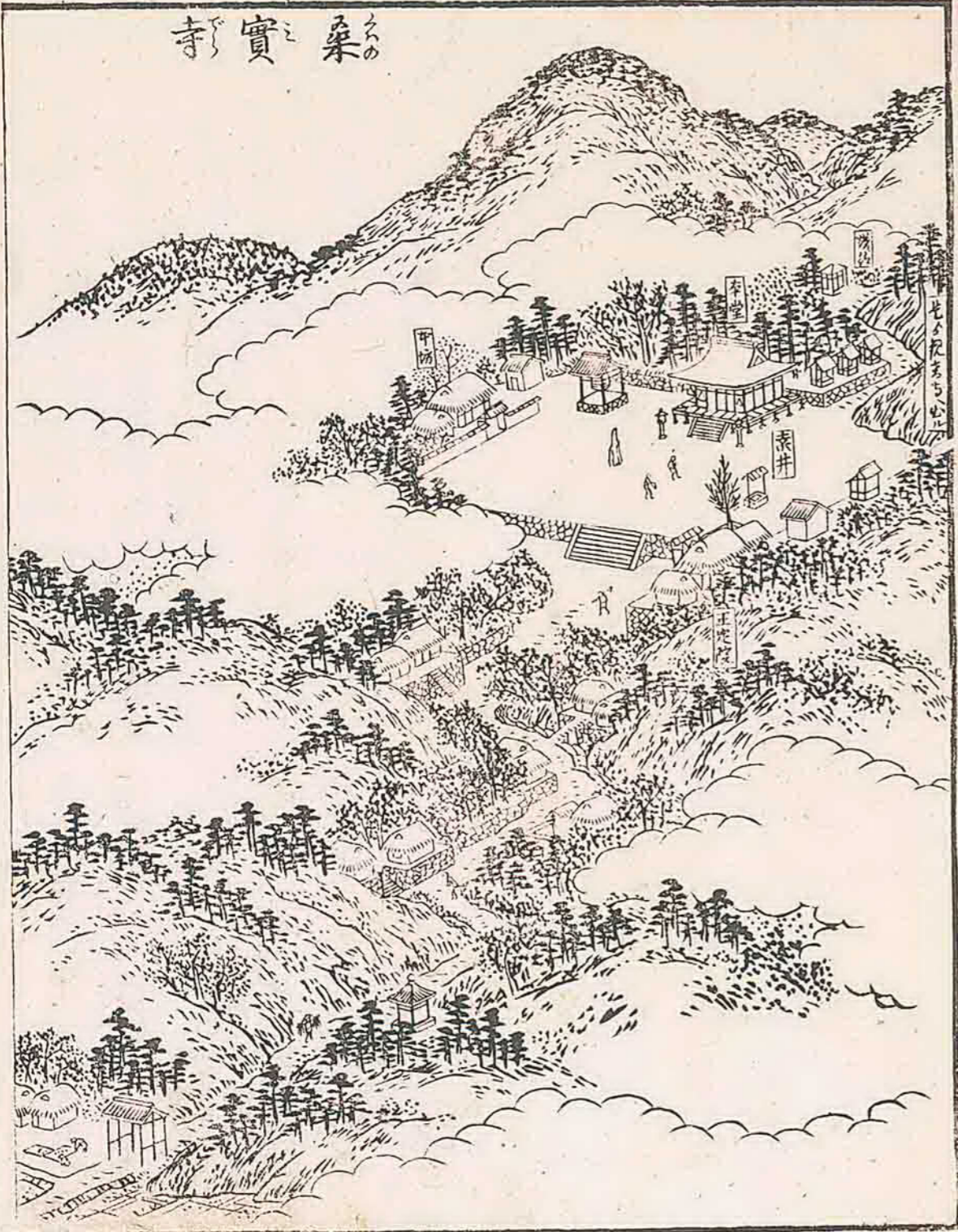
古曰太山之前難為山。大海之前難為水。日域六
十六州之一州曰江。江左有山名曰安土。其山不
在高。其名高大山也。盖夫非山之獨得名。有寬仁
大度人居焉也。劉夢得不豈曰乎。山不在高。有仙
則名。水不在深。有龍則靈。夢得之一言可并按焉。
層巒之崎嶇乎上者自然。金城也。滄波之渺茫乎
下者自然。湯池也。自天地開以往。雖有此山。一人
無識者矣。葛原帝王的令孫平清盛。其一代之
華。曾前右府君者。禁庭綱紀。武門棟梁。而實天
聖武也。先是天正四年之春。一見此山。便識萬古

城地開闢洪基權輿于此矣力士星馳揚石巧匠
霧列運斤則不終三年而其功大成矣潛慮夫數
百丈之石壁千萬間之大廈何翅力士之力巧匠
之巧乎唯流出府君之一胸襟而已目機之所明
意匠之所巧離婁之明公輸子之巧不可跂而及
者也峻宇高堂之凌碧虛者也極夜摩都吏之壯
麗兮直欄橫檻之聳翠崖者也盡秦樓魏闕之華
美兮布地礪礪者兼露內潤葺屋瓦甍者帶霜外
光西湖月之上玉階者供府君之夜遊也南浦雲之
飛畫棟者催府君之朝吟也颯颯松風之動金鈴
聲呼萬歲山耶紛紛白雪之映珠簾影含千秋窻
耶權門貴戶之圍山玳然也遠水鱗萃也盡是無
不丹漆黝望寶塔之突兀出林間者疑繪遠寺釣

本卷四十一

艇之ノ、浮蘆邊者怪圖歸帆瀟湘十里風景嘉
陵三百里山水不可同日語焉英雄豪傑之擁繡
鞍出入于相府貴介公子之翻錦袖往還于官途
爭紅花紅葉色也億兆民之富驕者鐘鳴鼎食之
家也見者反目駭汗聞者拍手賞嘆矣江北白鷗
懷惠占閑江南梅花被化含咲信及豚魚咸知草
木當此時市人歌于市野老扞于野行者遜路耕
者遜畔雖堯舜民文武民不可讓焉加旃起王道
之衰修神社佛閣之破續斷橋平嶮路是認四夷
獻貢來復焉八蠻解辦服膺焉或臂後鷹乞尸于
其幕下或上良馬請將乎其麾下吁策勳偉矣哉
鳳凰現瑞麒麟呈祥者非今時何時乎祝望祝望
向所謂太山之前難為山天下人亦將曰安土山

桑實寺



之前難為山野納雖蓬衡叢州標散陋安管見此
 名山豈無感慨乎卒綴卑詞於八韻述盛舉之萬
 乙

伏乞 咲覽

六十扶桑第一山 老松積翠白雲閑
 宮高大似阿房殿 城嶮固於函谷關
 若不唐虞治天下 必應梵釋出人間
 蓬萊三萬里仙境 留與寬仁永保顏

岐下沙門玄興拜稿

信長記云

信長公沛奉命不意卜乃南化和尚へ黄金百兩小社三尊符牒又
 此帛沛使とて其勞功と慰せし所又策表和尙の深徳慈沛感有て
 金子百兩銀子百兩小社三尊二位法印沛使とて恩賜せられ乃
 後と深徳却て光まるといふ箇様の事成やとゆえにけ人の事世を何

半も辨湯して已達せんと達せらるる半ありて一全なる事
 之のく更く女は自院の受をば圖と天竺寺破壊の節に補人幸と
 此を考ふると此のひかり禪齋と付ゆひとて是は不名に於て之を
 たり此記まると半力ありて言端う所なり此半言端と應まら
 得とざる世の人今ふあるも其を其公せんとする事なり
 柞は城と信長と天守の城ありて此の初より其威勢強大にして
 城の天守を建りし幸は附りて此を建てて是は神籠り六諸度大
 夫の家別と百千の大慶新造と名を在存寄れ後々城に圍繞
 する幸秦の阿房宮もを想と考ふ所は難有り時小天文十一
 年六月十四日未明小安土城の天守小明智左馬助大坂放ち所
 燈と形を憐れむは附焦土あり然今は城墟を思ふ小巖の崔嵬
 こそと軋龍の形と遠く林樹を蒼蒼とて勝く天守の址也惣見
 院殿の古蹟は建す前と小石壁礎石あり北の旁と湖水渺茫と

して和のゆき鳴て所沖五所生湯を築く不向也此れは
 比良嶽比叡の高根也意の幸む長等の小列と遠く眺むは城
 ありの巖をてふ不見之と南の旁を田園墾とて三上山也
 風色東より桑實寺觀音寺の古殿も小蒲生野荒蕪とて
 みれば城の眼下に遮る柞織田家の滅亡を望し小秦の秦城亡を教
 ありて只天命ありて一睡の夢乃て是なる如く有り也思はるる

織山桑實寺

惣見寺より八町許あり
 本尊藥師佛 十二神將
 附土師老 附老

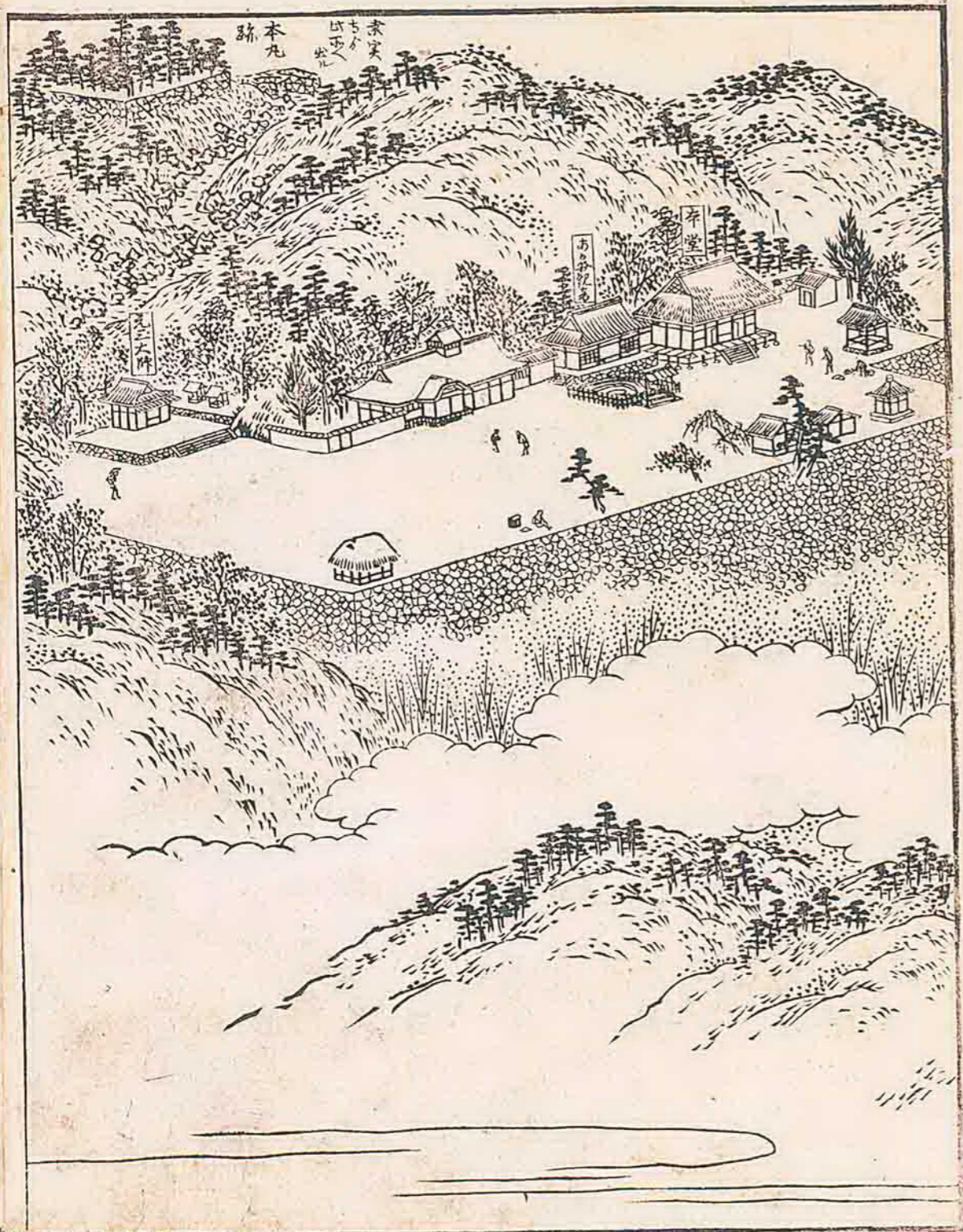
當山は古寺ありてむら白鳳六年奉尊湖水より出現あり
 其後元明帝の御宇禪定との息定惠和尚唐去りて歸朝し
 素寧を携へ來りて小極しを龍峯法を教ふひ當山に建宮し

箕山古城

東山道武佐より一里許
 右の旁あり

去程不拔開齋兼禎子息在傍督義勝も兼て家老の者た石家信長
 苗圃本後向せば定く海道筋の城を先攻めし御は留山の城は後
 の事宛しと内務梅重よりけきひやして南郡を幸ふあつる兵
 城をぐり勝つて後一信長は苗圃の徳園を幸ひしと一は海道
 の難易を好むべし秋の謀計をを懸け入る馬ぐりしを回尋せし
 親善寺和岡山へ押寄する様ありて和岡山を以て居る之を
 相向し和岡山より奥なる箕原の方勢を押廻し後法本按本
 相遠しとせ見えたる信長は右傍に尉本下藤吉丹羽丹羽左衛門尉
 浅井新八を兼て箕原の責を不定しける幸あらんを關を破りし
 害なる不城の肉もを吉岡の何某建初源八を以て花を以て山
 下一とさく人せしけし不態と弱くや今報く人殺をうり害せ
 城も幾たび叫ぶ喚んぞ攻る間叶はし城守引取んとしけるは
 山の事もうと早能く兵ども或百騎許討た勇ふしとる幸あら

け勢とぬる家老の者ども中定人の大將言松梅へ下知しけし
 より中む所よりねぐらあまたおび居るにねむりて中城遠け
 旗は物るんぞ殺入打入面もさだに込んとしけるを款しとて
 思ひ及んぬ松梅して其不態とまてりける中入とひはれを依之間
 多小與せし依之間久六原田與助本下多小與せし竹中半兵衛
 將領實亮兼尉本村隼人丹羽多小與せし林志鴻形と兼
 かねた是止と持と持と持と一合攻助られし旗を幸洋を洋不
 して降之きと申する間即は由を己人の大將へ復しける信長は
 も幸うれが多小ありし間依之る進もあまの城中の老ども一合
 と助多味を待たせり居るとなむらいつく信長は何ひやれ鬼も
 角毛幸の社申す小斗ひ依しと空ひし方箕原左衛門勝園を幸
 とせよつりたる依し本營をお送りてせ見えしとつりたる箕原城落
 去せしは山と和岡山の城も其後開退く親善寺も鬼やせん南



本名一四十五

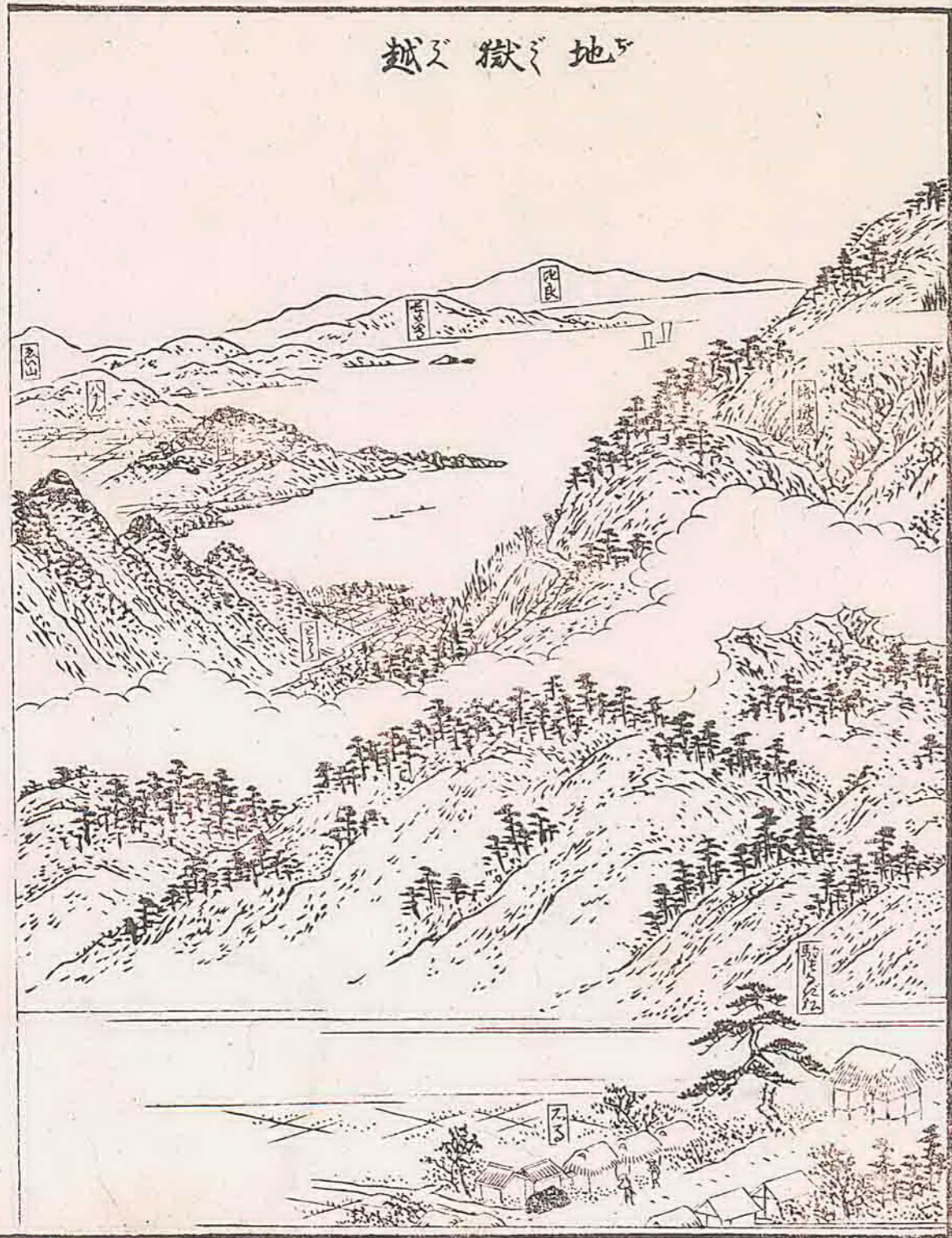
石山

やあらんせやめは強きなる小三雲新左衛門尉日三右衛門尉申
 乃かとは是小三をせ給ふも浩くは叶ふなり一す川落させ給ひ
 身と金うして時言成侍に及余統の恥を雪んと思ふは疾く見
 等が居城へ返せられ人去給へ家老の面々計存られ作せ声
 成放し申され給ふも肉く返さるるありむとあせせられ給ふも
 あの鬼神の操る信長小三や成果中く敵討中幸思ひも上ら
 ば惟りうせば我も明らんと早きくせりしはた救幸候別
 所るは好波とくいあんなれども上中不令城助り行し思ひは
 自れ執事と切さる何の御曹子に准圍中我言丈其は何と
 形どの許申君臣上下此分も形く上をよと親善寺坂と下立
 女子共と聲年次あり小悲とあひて誰れも言ふ暫く候り小分も
 ささう形も給と聞得く言ふなり一毫小三平家の人々都と落
 させ給ひ一分也と角やせとれく表り形て親善寺の城落

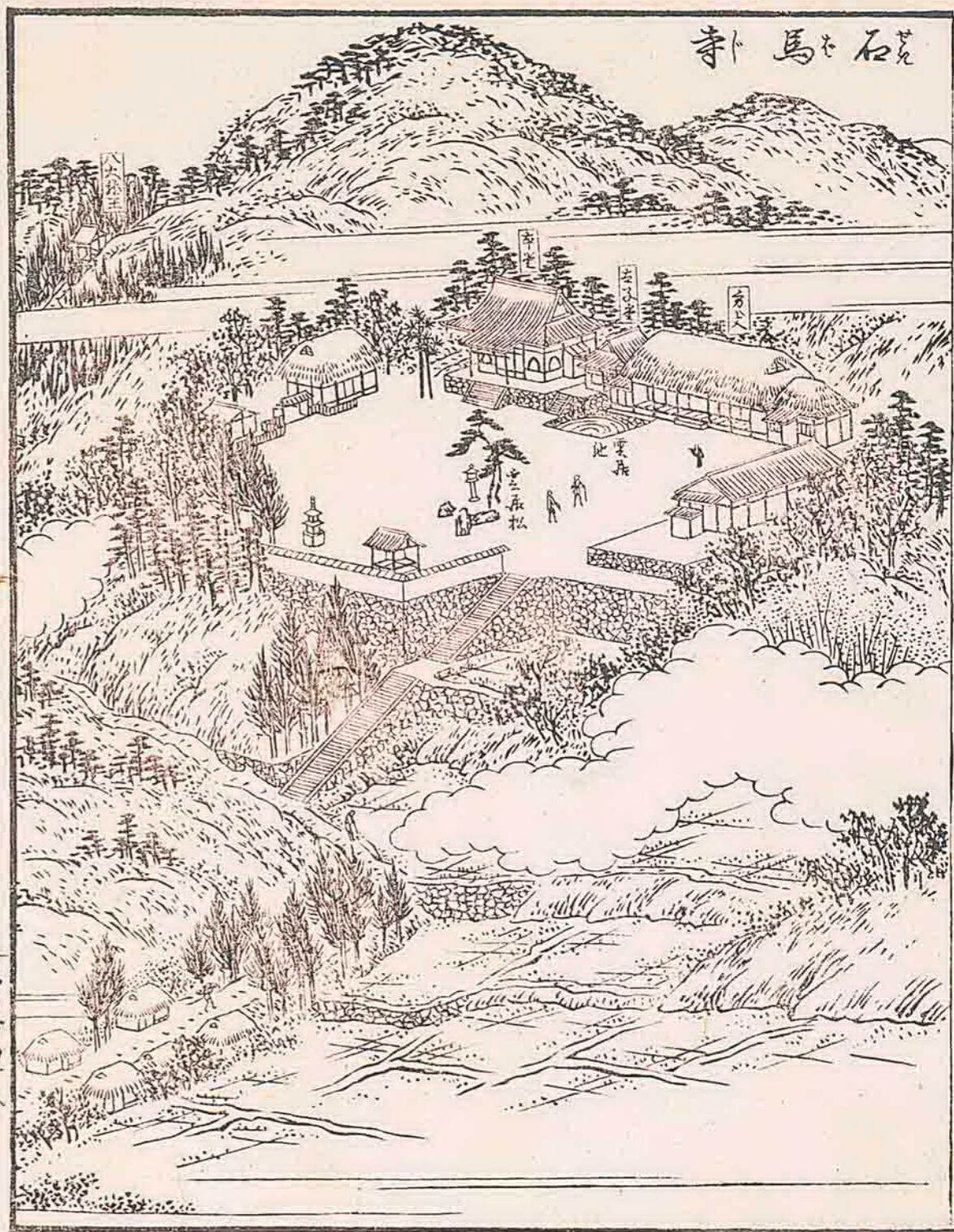
小松寺
瓦屋寺

去し多れ前々小楠藤一棟共一日二日の内小十八箇前中を兩退を
 其外味方も降る業とば人質を取其内小己が最傑小三を給ふも有
 退散したる城々小宗徒の人々入並れたり折込に國中の城々將某
 倒のでく波羅とくせ落去したる幸は信長郷の一胸襟よりゆる
 智謀るる世留山もんとよ攻意の給り能く兵は多く亡ひるる
 箇秘よとくりしやとけり兼て敵の謀謀よく聞はせられたる角
 と本よりこれ鳴傳謀畧の益する幸奉てやさんもいつ半七と淡
 井が家老小三尾尖化ちたりは其傍の人安んじむと智謀の深き
 幸とる給ひや漢の高祖の天下成保しを信等も張良ありて漢成
 惟幕の内小めと王若此作中成し幸も有り今味方の將小本
 下秀吉ありて深慮外外ありは幸和漢等し此漢とせられ給
 無他山の尾續と小平坂とよあり
 平家盛の建立ありとせ
 小松より十洲津東にあり聖徳太子の御建營の寺あり
 むり東大寺の庭をば所めく焼くとあり今ハ様宗

越之獄之地



石馬寺



地獄

難して云教は伊勢より上流ありそれ故に難く安土より下流
 地獄越へて石馬川並ふ
 諺云此坂踏甚険一をて油一今とびり観音寺滅落去の
 け道不逃落一者救志くたあひと谷こ及び岩をふりこれ又一本の
 根不踏踏して倒れお其上成難踏く逃ふ者多し故不名はくとも
 け炭より見せ落せば安土山の麓より湖水漲くやして船下に八艘の
 市中長令も山水茎忌多曇鳥遊小向つ城足柱を唐崎の松坂本
 比敷山比良の高根ありと望田より北浦とゆきと下流とて流あり
 子香の舞育好の月ゆけくとも寺教海士れ志とて舞子と
 て伊海一列の風景乃地獄とす

織山石馬禪寺

神護郡石馬村の上小あり
 福宗源家と津都織山と云

とれるお乃本葉落りり地獄越

蕨音

高宮の駅れ
 やくしとち
 紅葉あどふ
 保つけり
 つみとこ
 布橋坂
 多く鉄て
 國へおと
 その名を
 高宮橋



奉尊弥勒佛 惠心傍都の地

南無佛太子像 淨自地

四天王大像 鳥佛作地

十一面觀世音 右日地

地藏尊 運慶地

閻魔王 小辨堂地

十一面觀音 太子淨地

西方大威德明王 上日地

方大本尊千手觀音 安阿地

北方多門天 上日地

役行者 淨自地

其外竹實もは朱衣の釈迦佛も唐思恭の等不動尊の弘法大師の等弥勒二尊の惠心此等跡見不動明王と元三大師の書をもつて殺行者の惠教と淨自等形り
八大龍王社 山頂小あり 當山鎮守といへば早のといは農氏
と名其時淨神像あり
柳尚中は推古帝此淨宇重徳を子北二案の淨時驍駒小原國內
狐巡視ありて此處靈地ありとて徹と名に立給ふ其五箇箇の一あり

又良馬もけ里小ごり終不斃く石も放不寺の跡と其石
馬今寺の藤藤農家の好あり年歴千歳より比連乳の附大五荒並
せ以迄年雲居禪降あふ来りてむり以多くは再營あり則堂
前と棟れん以雲居松とら女禪降と正保の頃乃人ありて後孝院
是夜と賜ふを圓へ

愛知川 名寄 高宮中七式里八町け宿と雲葉の名産ありて終水ふ遇ふ



高宮中七式里八町け宿と雲葉の名産ありて終水ふ遇ふ
形の流を一溪葉とら

け野吹まきく去橋村ありけ色とみね布備と織これ高宮文橋と
りよ者豊橋をさく千枝村ありてふ四十九院村とありこの
由流成なるふ本流成流の寺あり
四十九院唯会寺 四十九院村あり魁 幸山と号に 幸成古末寺東風

奉尊阿弥陀佛 醫三尺辨

當山と聖武帝の御宇行基大士の御創く初と相天
宗兼學形り奉尊阿弥陀佛今書院上人の御時今宗と
む光庭院行基大士の御創く初と相天今宗と
後光庭院行基大士の御創く初と相天今宗と
号中四十二間の假山中に御創く初と相天今宗と
紫石に尺許は石聖目天より年を治す所あり高
土中あり

馬塚後小あり弘長年中俗の老女馬不けり
其馬は新にて慈愛の者あり其娘の馬を養ひしが
は寺の中に慈愛をとりぬ石集りて
あつて色くはづら村小つて所は所の店公見は藤骨柳
はく程くの水を律りてあつた方山崎とつ新あり
信長卿の代と傍源をたす尉居城けり其次ははづら村
ありとつ高宮小つて

高宮川

那の名ふよて名づく

高宮

鳥居中まで一里半け駅と布湯敷をたふ家多
けりり農家に高宮湯細布多織せりりあつてを
高宮布とつ宿中小多た実高布あり是より南二務所許

道をく小多実の鳥居中をくつ

尚白

多賀大社

大上那多実小あり延喜或内

奉社祭神伊弉諾尊

末社奉社右の方小神明兩社向日社 徳野本宮 日新宮
天神宮 蛭子社 子安社 荒神社 大將軍社

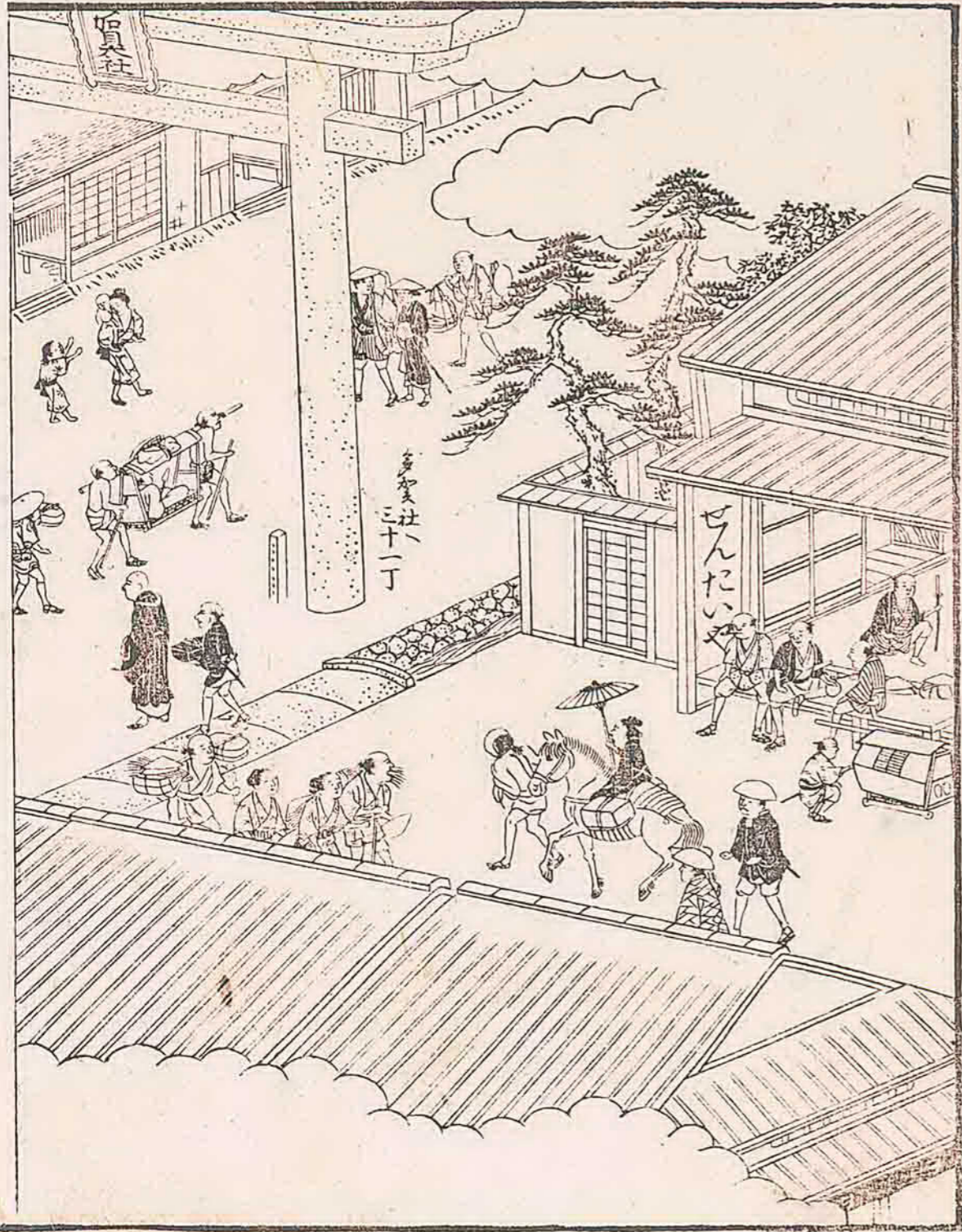
神樂殿あり 左の方小三ノ宮 養王堂

拜殿 樓門 奉社の 日出松 神本中社の

壽命石 奉社の前あり一名後掛石又松石ともいふ後家坊
引小不思張るるを柏の系に延の字を記すといはるる

神代巻云

又云 伊弉諾尊 構幽宮于淡海之洲 寂然長隱
伊弉諾尊 登天報命仍留宅於日之少宮矣



高宮驛
多賀
大鳥居

本多一五三

古事紀云

伊邪那岐大神者坐淡海之多賀也

神書鈔云

日之少宮者近江國犬上郡多賀大明神是也

近江在良方日之所初出也故曰日之少宮出

雲杵築宮在乾方故曰日之所入也

夫當社と天照太神乃とちおの御神母て浦一をば伊勢系

宮の専道をおくあふ多く語をりたり例系を卯月二年の日

こ種城おんとて遠近の之々高宮の町小群集して後ひらるる

は御神乃威徳形之別表と不動院とて神領三百石社地廣

してある耐と芝布向り相撲ありて此より懸ひいんはほ浦川を

は國の丈社ありとせむり

多賀よる國龍をばさひく一里まをりあき名は名りしり

不知哉川の堰ふゆふ

不知哉川 大坂村の東端ふゆふ 一名大坂川ともいふ

古今

いぬれこの山をいぬれ川といふは我名のはな

いすあふあめれとらあまれらぬめふたふと

いさ川今や氷もあめれ乃とこの山風をく吹く

平時光

鳥籠山

いさや川の上ふあり 倣小籠山ともいふ

あふふちふ霧の枕ふゆ 後く懸るくとこれ山風

後念

はく霧れらるる末れ犬とやまのふ懸るこの山風

春頼

鳴麻とみ子ゆりときこれ山風の枕小聲送ふ

後成

石清水八幡宮

大坂村御社の左ふあり 庭園近年に戸森田氏建ふ

はる道より表根味下(出る道あり又右の旁小多賀より御殿へ

出る道あり東園より表落の道之入小野村道の右れ上小石佛

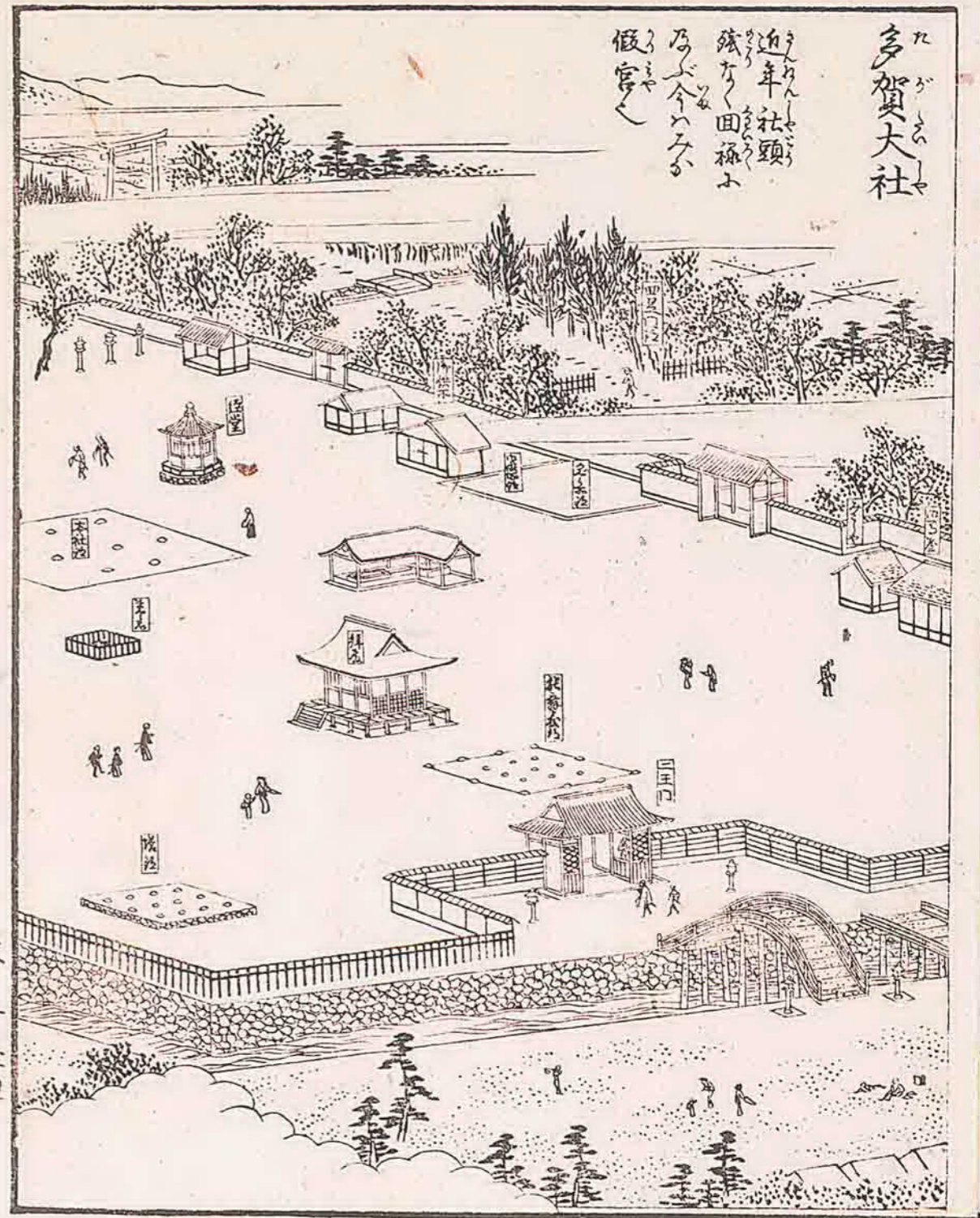
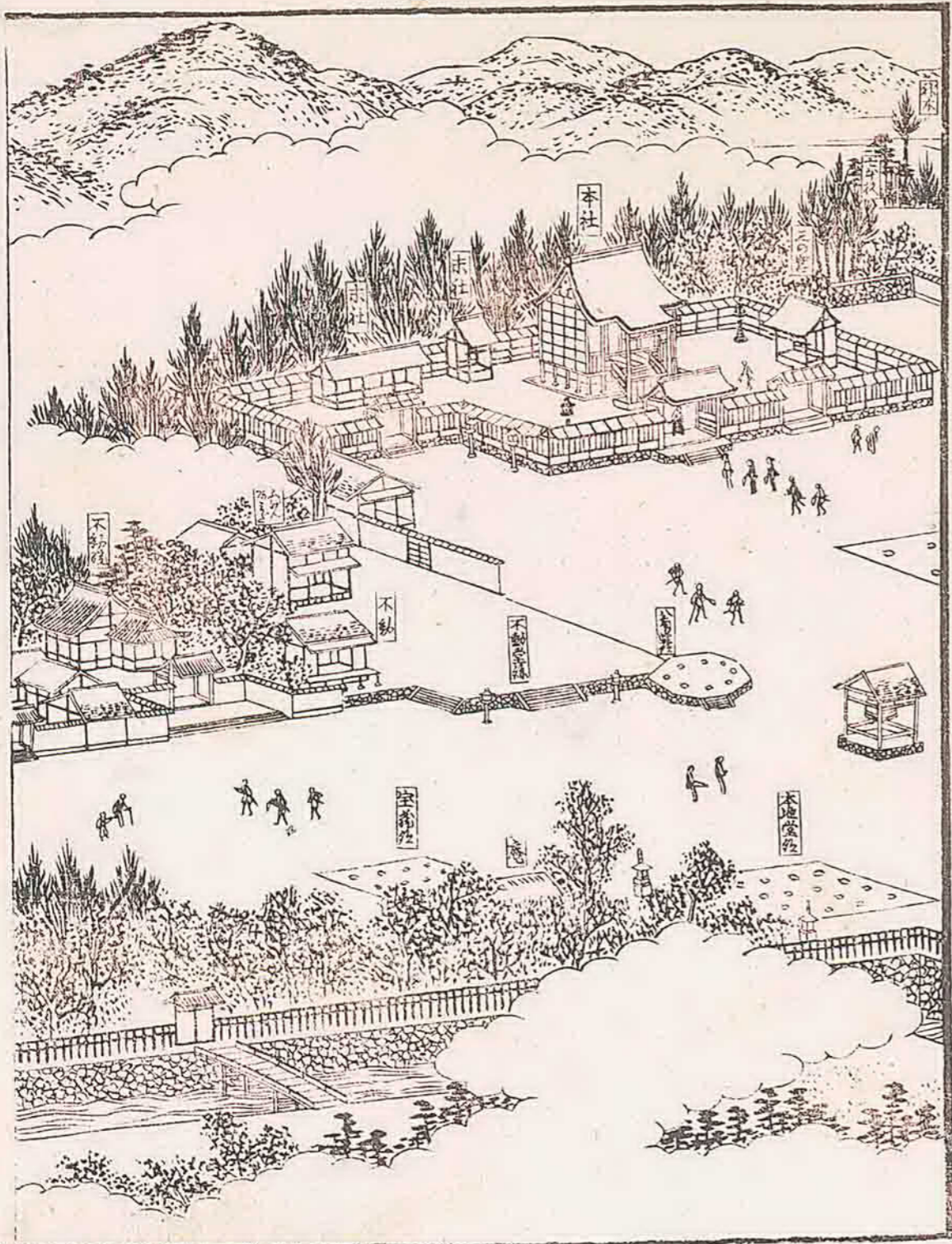
地蔵寺あり小町塚とあり

小町塚

小野村よりよけり名所しりしん 其地はのめぐ考だ

表より我身の果やあま縁はあふと此の處とあり 小町

家集



多賀大社
 近奉社頭
 儀方回祿
 乃今今
 假宮



鳥居奉
神教丸店

これがおれ
たふつやぐ
とく病も

茶に
さしひ
赤玉
と

新島

夫本

ひさしやう雪丸門とせうかと言はれや井小迷ひぬるか

経信

日

よを懸守若松の山に於日暮心を晴く去る我之り

井乳母

ふく松原

外と松原村といふ

後古

三平より世を此松原ちりり並死午久と若之方代

八原の
ぶ長

磯寄社

松原村を過ぐ海邊二十所

系神 日本武尊

白鳥の神といふ

を人ふとば名ありや筑摩此角海とらふ石の方一寺所
むらり入まば社あり

筑摩社

生か神といふ

祭神 市杵嶋姫命

拜殿 奉社の

若宮福

廻りふ回廊瑞籬あり

社あり

本居一五十六

近江國所之俊明神也神事ありて其神乃御世といはく
女此男一た子救ふはては總を催すその祭れ日てまはる
るれ男あかこ一たる之を見ざるありりて少一者わ
形ど志は違ひ物のゆゑてあみまじこあり先を救農
ぶとしていの神をなごり形とすなり

日

あつみまはるはまの祭とせはせははまの祭に
此社と延喜式不載なる坂田郡の月日極神社よりんを
むり土端の附に社を被さ渡つて馬してゆくとあまはる
の古中より一ツせまはるあまはる豆の飯と炊く谷を煮せしとせ
聞由今をば祭とえはる毎家四月八日筑摩の生土より
中より奉へハツより十二歳までの女を紙もてくらしを
結を二ツ被ると烏帽子持長をもてくらし神社に送りこむ
筑摩野 神社の西に地と
りるるる

本巻一五七

万葉

はる野不牛宿はあまの深いささきと色あまの 三女郎

且妻里

あまの妻里の地は神降のゆゑに人を知るを
あまの妻里の地は神降のゆゑに人を知るを
あまの妻里の地は神降のゆゑに人を知るを

夫本

潮海やちと妻ねもあまのはるか社と風をぬらん 泉長
後長

長濱

長濱の地は神降のゆゑに人を知るを
長濱の地は神降のゆゑに人を知るを
長濱の地は神降のゆゑに人を知るを

此地の志を編細細綿釣柄其外種々の物あり所は
凡そ推所許ありて地境も勝まり原は地と豊原秀吉

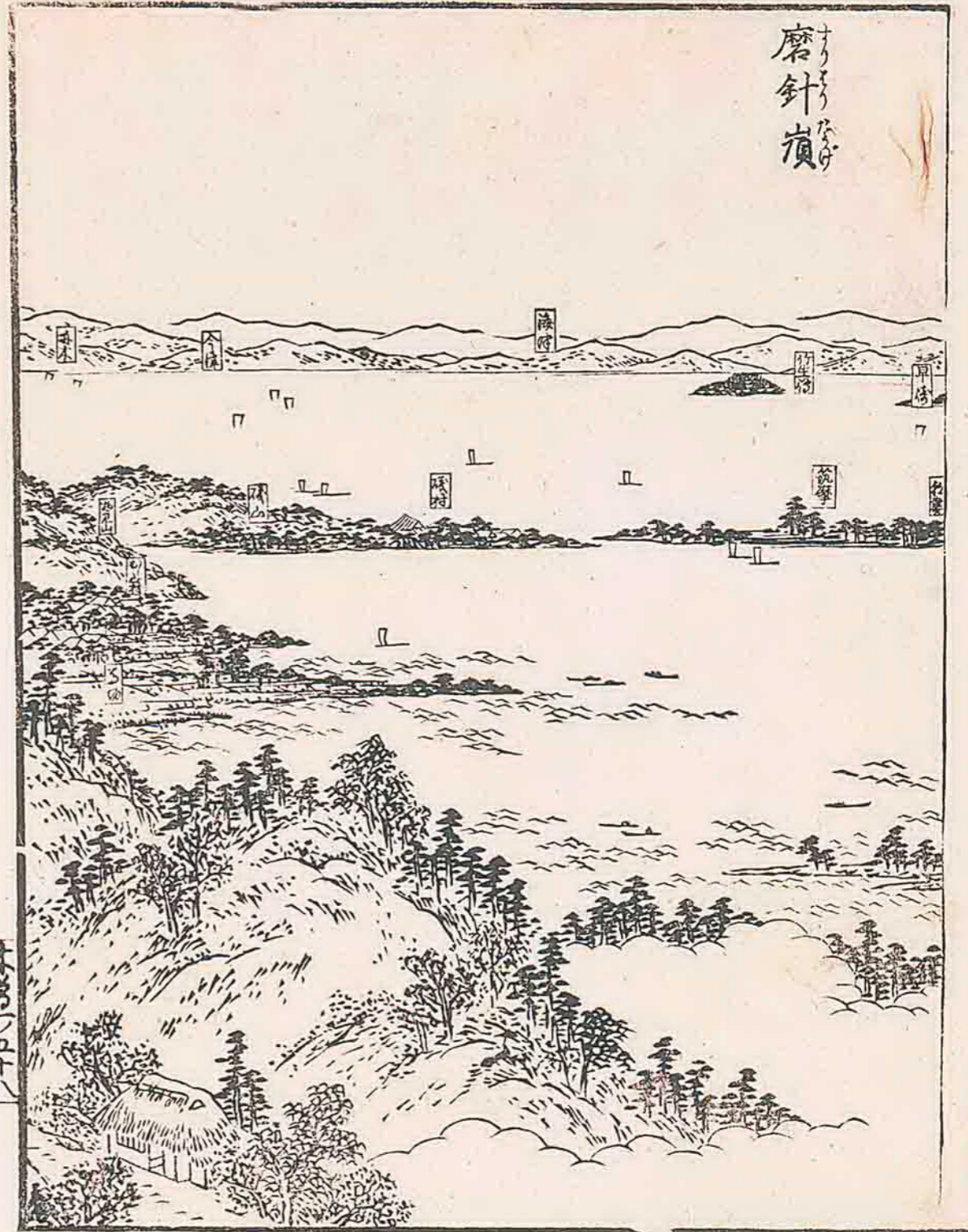
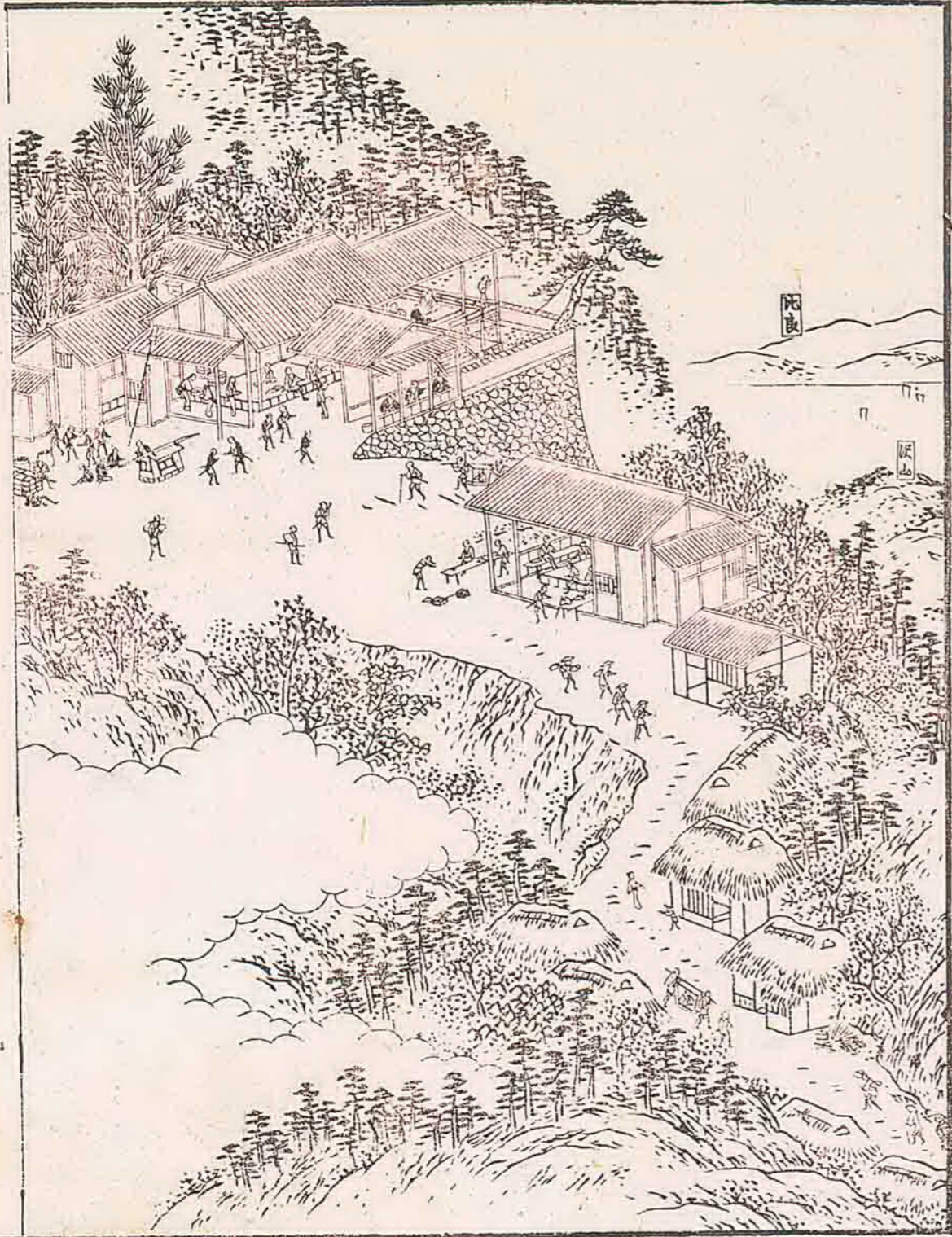
公もいめく御在城よりこれより接磨の姫路へ赴き給ふ

將軍山

將軍山放生寺舎那院 長濱八幡あり
幸社八幡宮 幸社 幸社 幸社

幸地堂阿弥陀佛 幸地佛とん

高良社 幸社の東 地主神宮



磨針嶺

本巻一五十八

熊野三所祠 西よりあり

稲荷祠 上よりあり

薬師堂 日所あり

地藏堂 上よりあり

護摩堂 日所あり

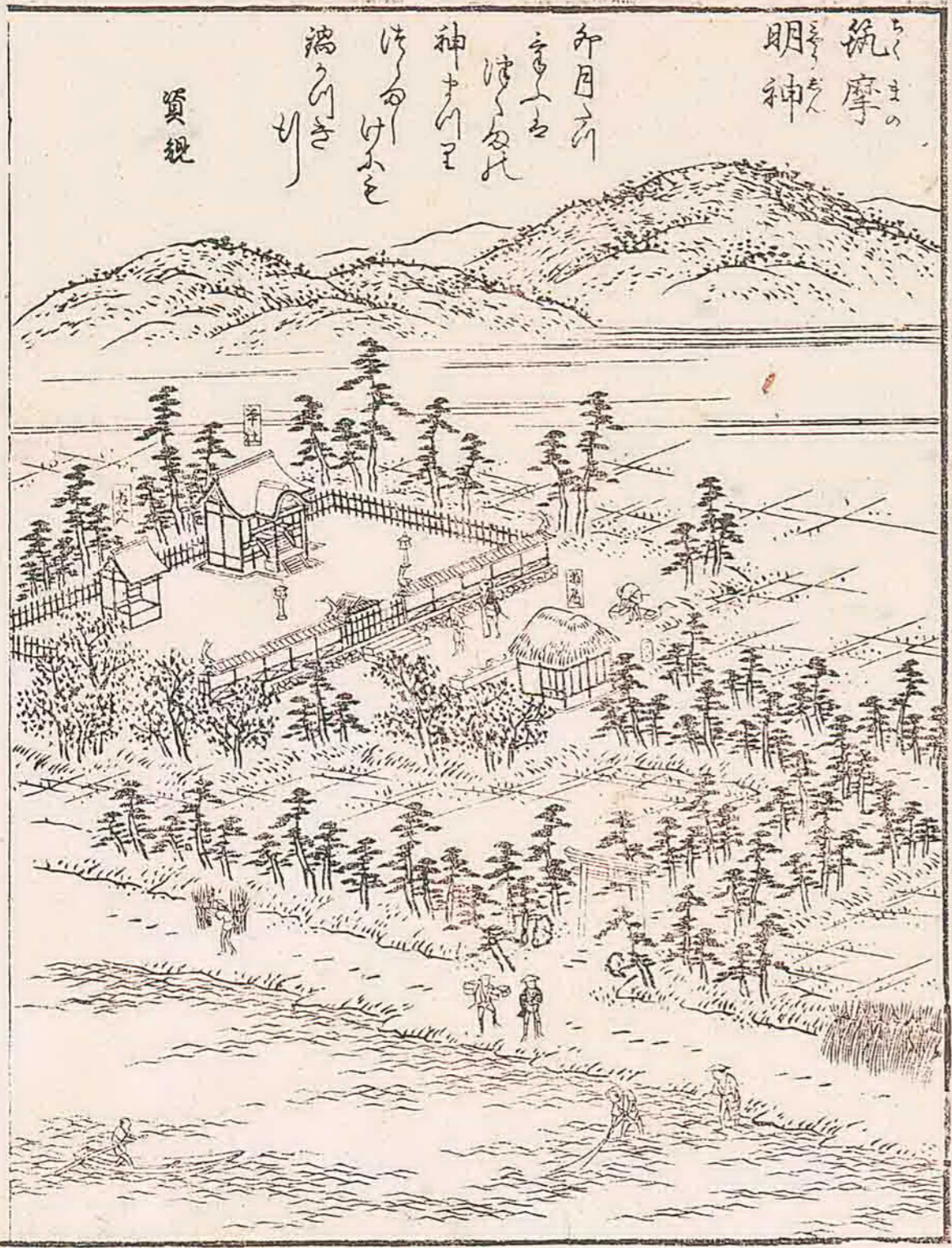
當社の初を八幡を即義家公東夷征伐の時と勅修し其
厚く尊崇ありて社於三千石寄附し其後後三徳院勅修
せし所の勅使中向ありせしれ放生舎を執りて其後其
天正の信長公の代大いふ廢し秀吉公津左城の時再營あり社於
百七石寄附し其後坊中妙覺院の庭中の曾台利新寺傳つが修
所と濱須池院石恩智紅梅等ここれ修あり後丹臺の額を
春源の寺と例繁と九月十五日ありて素山十二冊とより平社
出でて其社を掃り其山の所よりつら及ぶ風俗の程云云を
山のとより掃りむ至る壯觀ありこれを見むとて遠道よりこ
來る二三人を泊し群集する半指麻の如く名くゆき長原系

本書二五十九

統摩の
明神

丹月
神
神
神
神
神

賢観



浮三一夜仲島小の仲兼兼龍尺

神の御座る海の時ふけまふく抱頼心仲の傳ふ那 仲兼

春の秋乃浪間の白蛇蛇やけ傳りて春月の来らん

二月十八日行生傳小蛇とばるる雲井なるの小高樂は色須史ありて
書して蛇の内小なるものあり身まがたれまきよあてて琵琶く
仲兼こ蛇瓜抱き新良止に別は琵琶伝て小納く之仲兼も後小
其面龍乃登つて其終ふ不伝志るん 叔書出

平経改は傳小痛て神助法樂の物小一曲を孫んて伝ま琵琶とら出
形人や空室の安ん幸て寺僧即琵琶と抱く興ふ小経改めき
よせ給ひて樂ニツニワ孫く後弦上石上との小秘曲伝孫ト給小神
納受やあてまひらむ社壇より白狐如く遊びる社不思涙打れ種
正琵琶伝聞く神明の化理とめつげの思ひ所願成就疑ありと
てうまうとふ

朝妻 蛇

ひりしと
野の
蛇の
向ははに神
のてくうれめ
蛇もてあそび
るる

あられがりて
よるも
おきまき
蛇傳のあそび
うら蛇まきと

高嶺



あはれはあそびの機して
あててははとせくお思ふ
伝の蛇はまうひれはまうや
アははのあそびはあそびは
ちんてんてんてんてんてんてん
のあそびはあそびはあそびは
うら蛇まきとてと母の中

子早振神小祈のやうなや志落くもあつたるれり

行生橋乃そば小島ありてはとてたよ生せし橋より又由生橋た

り勢田川の中流に黒津の大明山とてありけし小橋ありて行生橋より

てらふとありてしとてらふ橋小毎年三月二日橋はるたとの事

ありて廻七十五間水面より又て小橋はるた松あり

琵琶湖

續千載

南北二十里東西七八里許或は四五里定て周廻六十里

新後拾

風くるに水海をそそぐ月影清し仲津若中

夫本

餘湖海

夫本

伊香郡小川東至二十所南小三十所小の峯より北流集りて

本書二六三

雜和集

さう一途江國余湖のうまに織女れりて水ありてふさりてこま

らふ男りあひてぬき委託て夜城よりたれれをさふて入陽

のぼらでやぐ其男れ妻小成て居るひふたり子どもうて水

ごほふ勢系にたれや天上へのやんあ痛ぞ一とてたてたて

ちたたるよけ男ものへはりわらるに其間ふけ子父乃りてあ

とろく何えはれ女よりさびくそ種成きて飛上りふさるこの子に

契りたふと我まの我身てあまお月りてああああ甘月

七日てゆふりちては湖の水とあぶ一其月ふるふゆひ結

ゆて別の涙をる人流りる供其子孫今やそ者り形人

曾丹集

よとれらみきつるれんそあまの天の羽衣降つらん

羨云小神天神は天女の御子こころり周旋余吾の流ふ天神

番馬

醒井中て二十所長溪より采原中て降をこれより東山道

たれ磨針嶺城こえく坂路をあやめ程りかく番馬の驛

あつては信長が家康を討つて後今を慮りて
名ありゆゑ平記を見てもは嘗ての如き
八葉山蓮華寺 後馬の歌中にある

奉尊 聖徳太子御世

六波羅山 寺ありゆゑはあつては平記に六波羅
二百廿年久自害せしむるふらふら

尚書と上宮と子殿の地ありて用基道日法作住姓と土肥二良

元頼即堂の左方小墓あり時宗二十五世阿上人と小塚川と

今宗とも元弘三年五月九日尚書山平山の蓮一向堂の前に於て小條

の連族及び隨士四百餘人系都足利勢と討負これにて是れ

自害と尚書と去牒ありて執事糟谷十郎と記に

去程小六波羅系勢の合戦討負て関東へ落らく由被病あり

多れあたりこれ京日夏抄にそむち川小洲四十九院とて針敷馬

解井相原其外俣吹山の禁裏あり山とて強盜淫道者ども二三

子人一族の種小馳あはまりて先帝才女之宮御通世の俣と俣吹の

禁裏小懸びて清光ありて多由城之將小坂ありて種乃御旗とて上末山

道外一の難所番馬の宿乃末坂小山此峯に取の降り岩の下るる

乃を中にたゞも清光けり表記に後守伴時志の京の宿とて

て仙躰とて山の海に小坂ありて山とてハ信長其兵二子孫

小ありてゆゑも此等小坂散らるるや今もこの山小七百餘母を足

がりたりと名ありて追ひけり幸もあは防矢はまゝとて俣本村友

時信瓜の後陣ふたせられ賊徒道を掃く幸ゆふ打ちして乃を

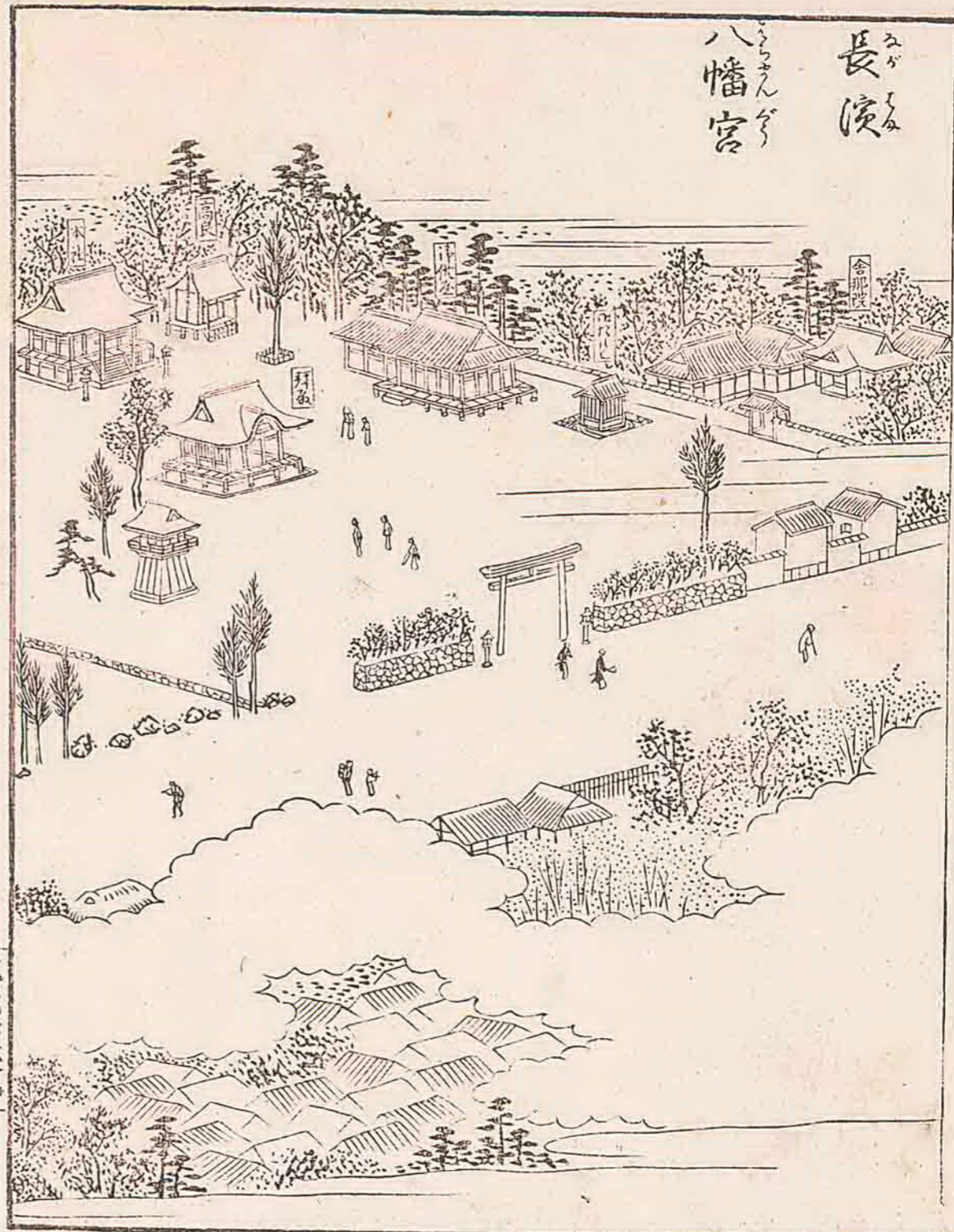
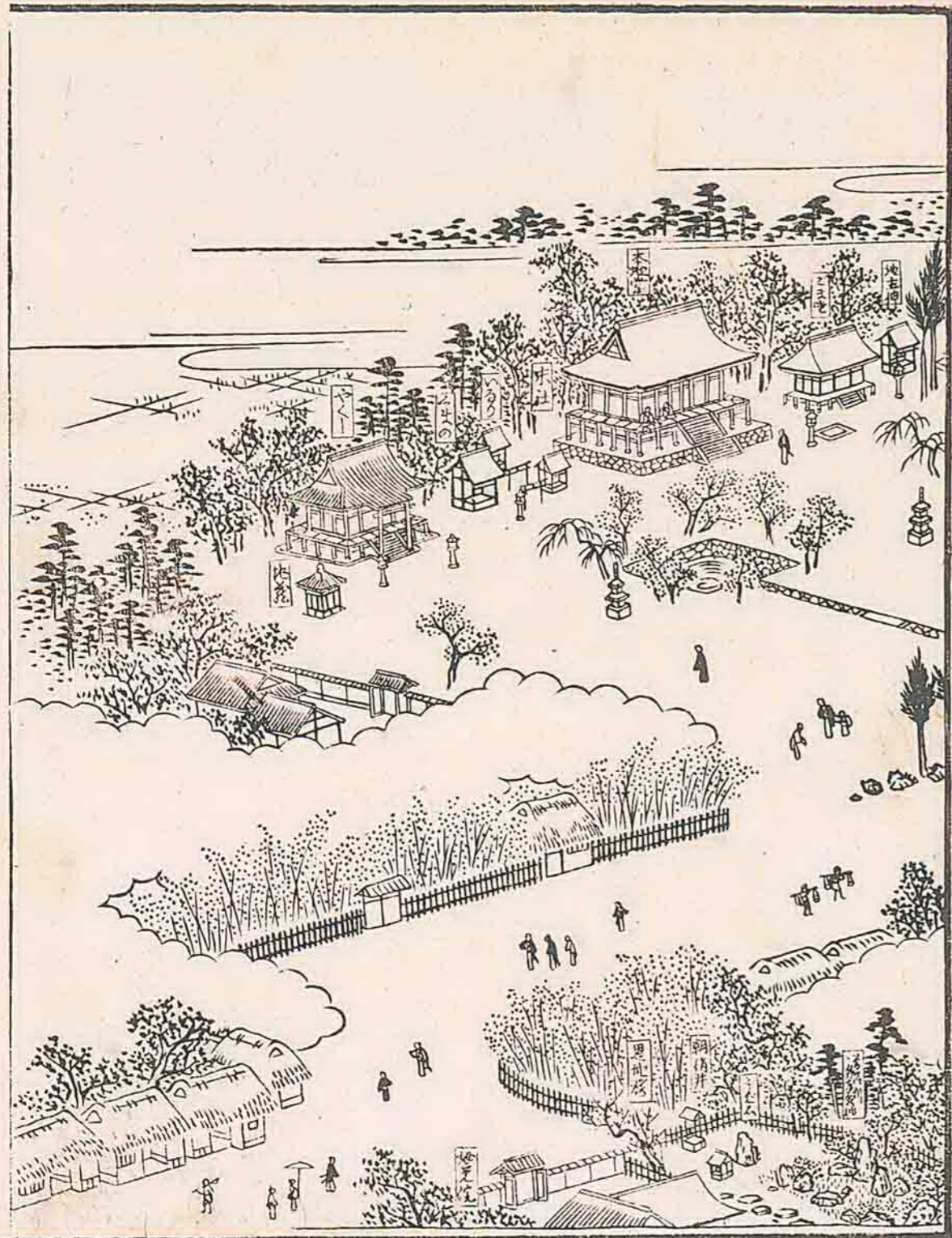
あけしとて糟谷と希小先陣を打せしる響樂流小俣と希と希馬

の俣と越人とする所小坂千此款道瓜中にたゞと相を一面小と矢本

城を築くゆゑけり糟谷と希小これとて思ふゆゑ尚書信長乃

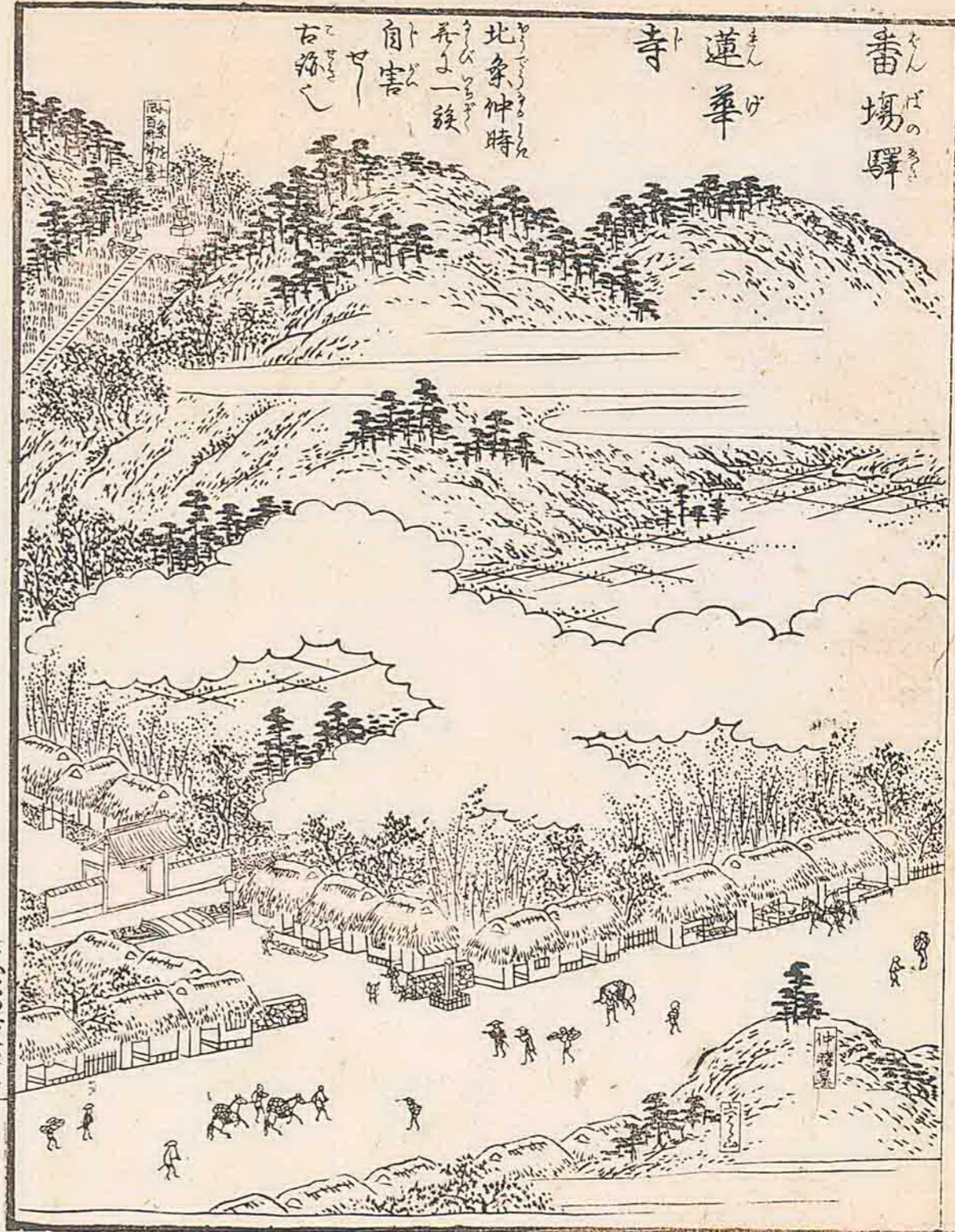
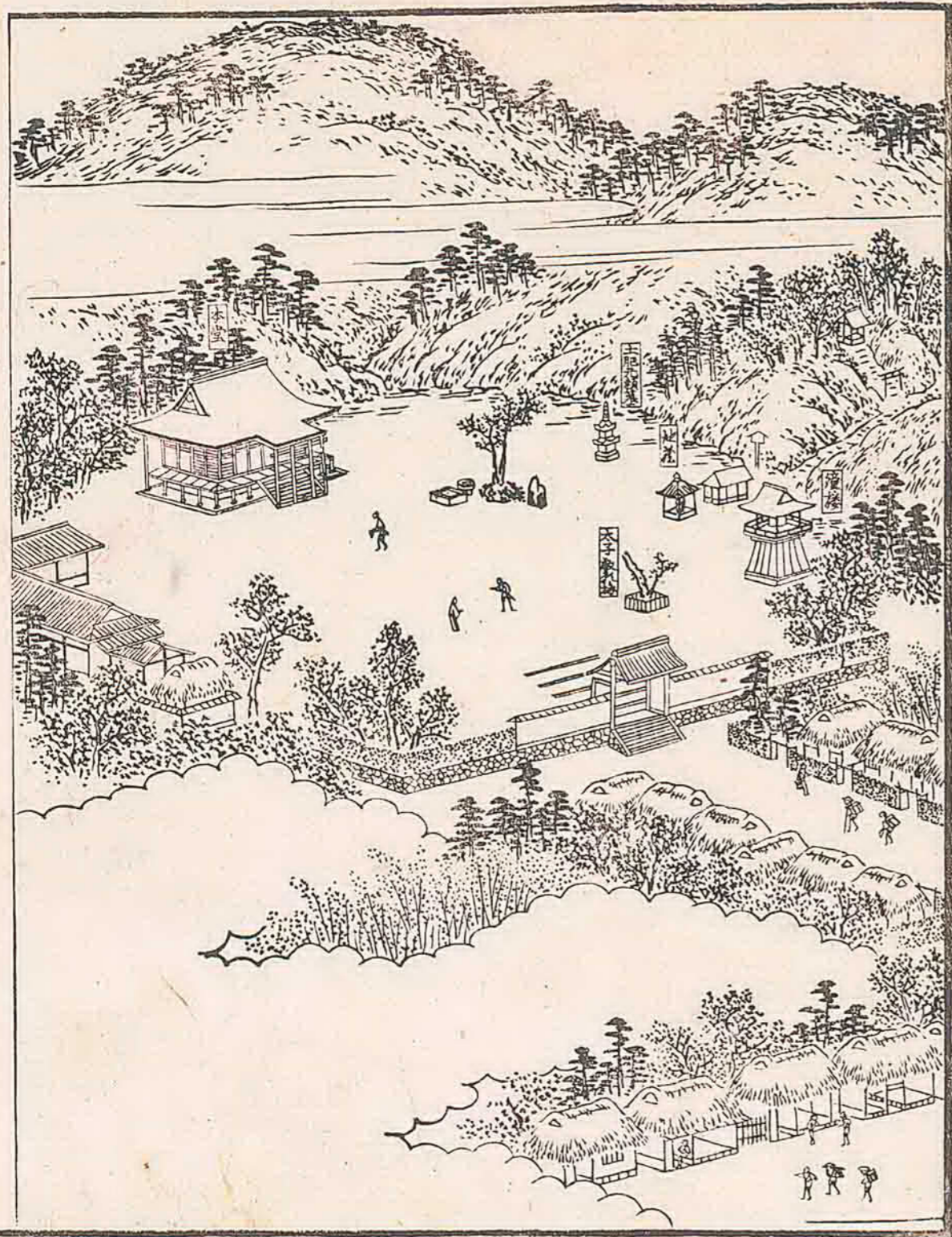
悪意どもが敵人の物具割んとて悪意のたゞと人小いゝとてあて

程もれば命を惜みて幾小程の幸ハよもあはし只一ひけりして



さぬけ堂小將たずして時信が待てくこぞ律定あつめとて又百餘
騎れ兵どもみおは堂の庭もぎとつゝあつる佐々木利友時信と一室
むろり引さうりて三百餘騎打なるがうあか天魔波旬の志いごあそ有
らん六波羅殿と表馬の侍とて非伏せよ取あられ一人もあはれ
流ひたりとせ告るる時信今いごあはれや形くろやとあつ川
より引さし格人本成とて京朝へ登ふなり越後守仲時とつゝと時信
と違へと侍あひるるが侍朝とたてつゝあはれは侍と時信もや
歌ふらるる今あつて引さしとつゝあはれは侍と時信もや
小腹とさしんざらぬと中へ一途ふを定とて文彦とくせとて
る其肘軍勢たふむひてさしんざらぬ武運中ややく傾きて南家の
滅亡迫るよ育べしと見あひるる弓矢の名がさくし日頃のよ
と忘さびして是中を付さし人あつて中へかふ言ひその
報謝の思ひ流しやとて一家の運をたふさぬわが何をとりて是と

報さき今と我のこゝの物小自害して生糸の報恩死後ふ
とあつる仲時不肖なりとて平氏一教の名あふ身も
定て我首をさうて源氏の事小つゝ料を補さく忠小備の事と果
さす言の中小禮ぬとてあつとて腹を切つ物わが糟言と
宗秋これを見とあつとて源の神小つゝを侍を押して宗秋とて自
害して冥途の侍を侍とてなつて侍はふとせむひぬ
幸とせはさしんざらぬ今生もてなれ際乃侍あ逢見とてあつとて
途るれとて見とあつとてあつとてあつとてあつとてあつとて
流佐中つゝとて越後守が柄中を腹小はささくとてあつとて
て已が腹小はれとて仲時が侍小つゝとてあつとてあつとて
是と始とて佐々木徳成本司子貞次郎左衛門月三郎義房月三
赤丸高橋立赤左衛門月三郎良月又赤左衛門月三郎良月
源七左衛門尉月三郎赤左衛門月三郎良月又赤左衛門月三郎良月



滝の者として都合四百餘式は日射小腹を切つる血を其腹に
こめて拾も美河の流るるに死骸の塵も充満して着る
乃肉小美に彼をばくの二千のてうさへあぢん小亡びさう人の
に百万の士率の水は瀾まらんもこれゆゑをさへてを養ふる
幸ども目をあてられぬ言も形も主上上皇をば死人
どものつらなる派清流さる小肝も心を御身小すれば果
せおつりたるか 下畧

番馬の宿坊りてか糸とら小新小ぶらさうも米原の道あり
樋は村石打を通りて名小ぶらさうが井小ぶらさう

醒井

柏原中の一里半は駅小三水四石の名所あり所中小流れ有て
至く清く寒暑も増減あり
日本武尊居寤清泉 所の中程民家の敷
草那藝劍置其美夜受比賣之許而取伊服岐

能山之神幸行於是詔茲山神者徒手直取而
騰其山之時白猪逢于山邊其大如牛爾為言
舉而詔是化白猪者其神之使者雖今不殺還
時將殺而騰坐於是零大冰雨打惑倭建命此
白猪者非其神之使者當其故還下坐之到王
倉部之清泉以息坐之時御心稍寤故号其清
泉謂居寤清泉也

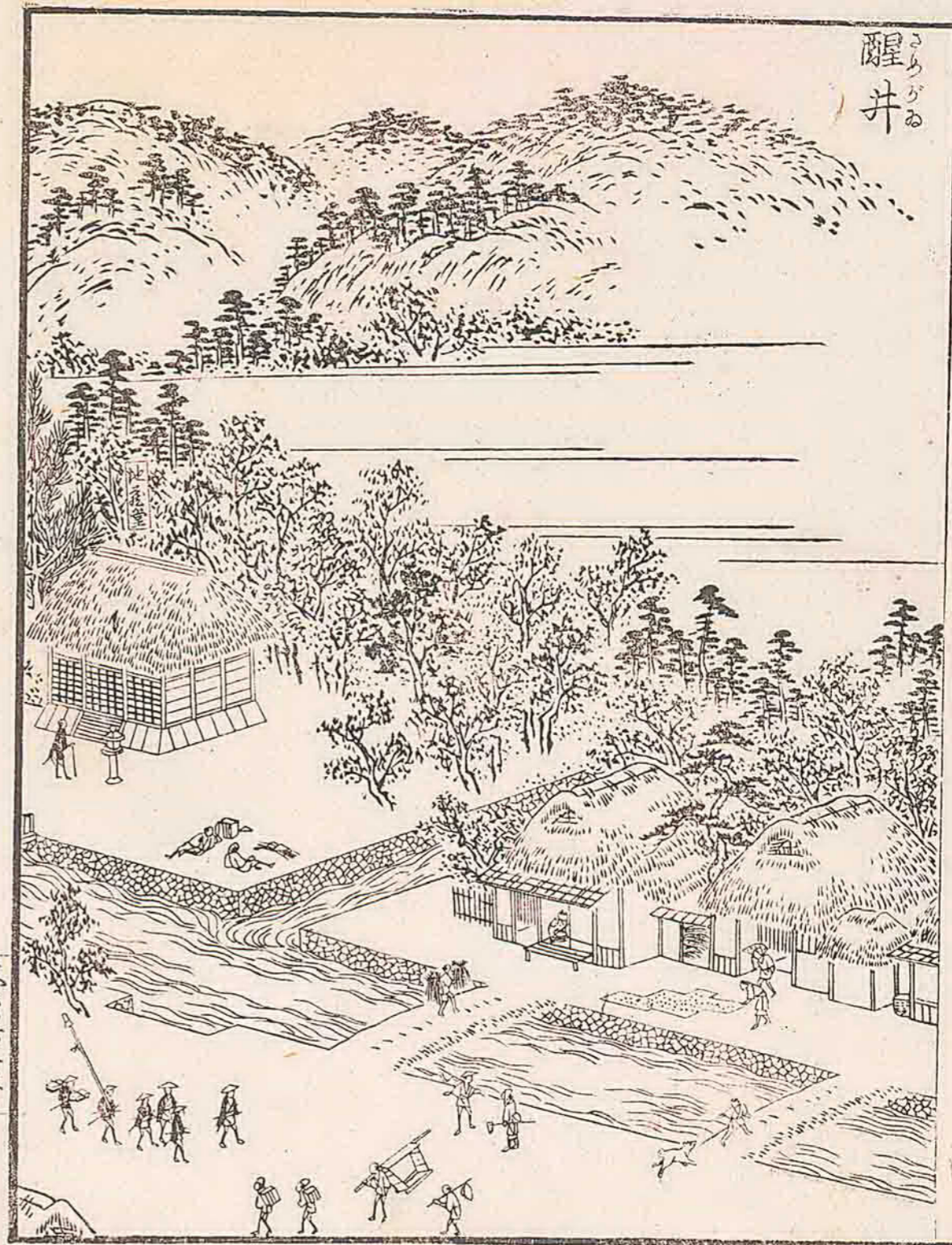
十王水

水よきて乾くこと沢登の名小その沙流川乃面石
西行水 西所民家の裏小あり岩間より清泉湧出
泡子の里流あまも怪しき幸るんをさうさ

日本武尊腰懸石
瓮石

日本武尊腰懸石 伊吹山乃毒草と清め給ふる
瓮石 腰かけの御小ありさうこれ

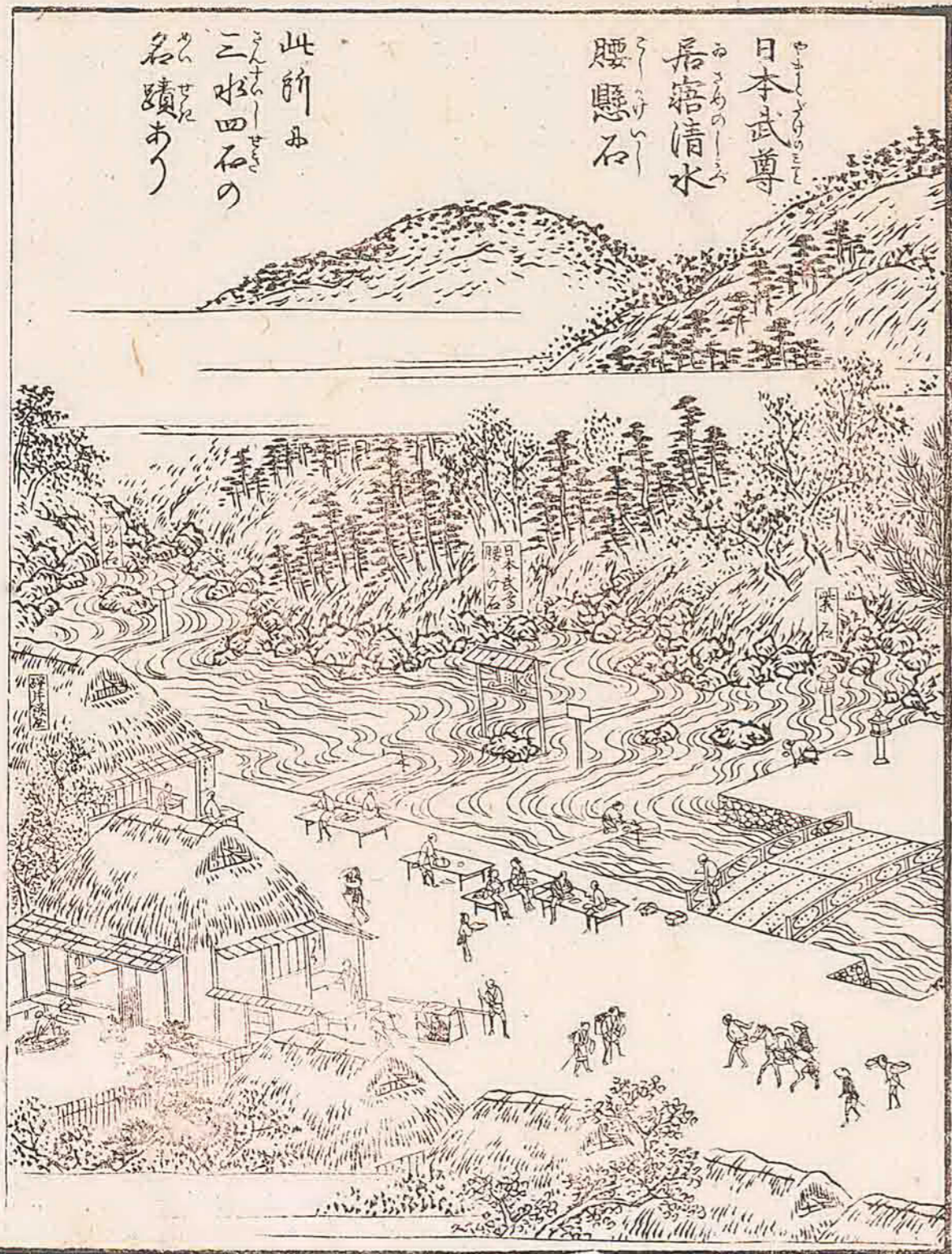
醒井



本巻一七十

日本武尊
居寤清水
腰懸石

此所也
三水四石の
名蹟あり



光緒紀り
ひまふにふる家とすたふの遠せりる意はあず井乃水 阿井

喜ぶ笑一醒弁を見ればけりて本の花光根より遠き所
法もあつたまじしき中をすりてつて中をふりてしむり
隙のちまはけきけりて程るまは程の根人よりしてすまあ
婕婦の園雲の痛れ風ふあて志をくく口を神のまはま
道るれどもちさくむ事物くく文よのれを彼西りか
乃神色も清くあけりて極けきりてて我をたらしめり
よめれまじりや

この乃本陰法法事すすして志りもき思悔を免 免り
醒弁乃法水も親くく一巻む安佐川あけりてこと幾
あんざ村を道ぬる人梓山あけりて松と形りてり
梓山あ波中道と海まらるるねは波國之契沖の吐懐編
け款と知るる長沢村をさく者もあつて拍原の宿小者

拍原

今頃中一里は駒と修吹山の麓ありて

修吹山

坂田郡東山にあり七高山の其一なり道は長修山
修吹山は修吹山の麓ありて六月の中は剛小登り山下に先達あり
野山石を修吹山と名づけしと修吹山と名づけしと修吹山と名づけしと
修吹山は修吹山の麓ありて六月の中は剛小登り山下に先達あり
伊布貴 意布伎 伊夫伎 伊福貴 五十菅 膳吹 異吹

後拾遺

今頃中一里は駒と修吹山の麓ありて

新古今

今頃中一里は駒と修吹山の麓ありて

新勅

今頃中一里は駒と修吹山の麓ありて

新撰送

今頃中一里は駒と修吹山の麓ありて

長尾謙信塚 松尾寺あり

71

卷之七十三

